

高校生いじめ防止協議会

1 日 時

令和7年11月1日(土) 午前9時30分から正午まで

2 場 所

東京都議会議事堂1階 都民ホール

3 出席者

都立高校生9名

4 事務局参加者

山田指導部長、藤田指導企画課長、小鍛冶主任指導主事(指導企画課)、河野主任指導主事(高等学校教育指導課)、鈴木統括指導主事(指導企画課)、川村統括指導主事(指導企画課)、松井統括指導主事(高等学校教育指導課)、菅原指導主事(指導企画課)、田後指導主事(指導企画課)、近藤指導主事(指導企画課)、東課長代理(指導企画課)

5 傍聴者

1名

6 報道機関

取材0社

7 内容

- (1) 挨拶
- (2) 自己紹介
- (3) (協議) 東京都におけるいじめ防止等の対策について
 - ア これまでの協議の概要について報告
 - イ 「いじめ防止に必要なこと」の協議・検討
 - ウ 高校生いじめ防止協議会からの提案・意見書の提出

8 記録

【高校生委員A】

- ・高校生いじめ防止協議会の開会を宣言

- ・高校生委員の出席状況を報告
 - ・本日の司会者が高校生委員Bに決定
- (1) 挨拶（山田指導部長）
- ・「高校生いじめ防止協議会」委員へのお礼
 - ・「東京都子ども基本条例」を踏まえた本協議会設置の意義及び本日の協議会への期待について
- (2) 自己紹介
略
- (3) (協議) 東京都におけるいじめ防止等の対策について
ア これまでの協議の概要

【高校生委員C】

これまで行ってきた事前打合せの協議内容について説明

- 第1回の打合せについて（令和7年8月18日（月）東京都庁で実施）

- ・委嘱状の交付
- ・自己紹介や委員の関係づくりをするためのアイスブレイク
- ・事務局から、本議会の趣旨や方向性について説明

協議内容

- ・いじめに関し、児童・生徒が当事者意識をもって考えることができるよう、教育の充実について協議
- ・スクールカウンセラーへの相談のしやすさを高める取組が、いじめの未然防止につながる可能性について協議

- 第2回の打合せについて（令和7年8月21日（木）東京都庁で実施）

- ・いじめの未然防止について必要なことを協議

協議内容

- ・いじめの定義等を正しく理解するため、動画等を活用した取組について協議
- ・「いじめ総合対策【子供版】」を活用し、いじめについて探究する授業の実施について協議
- ・スクールカウンセラーへの相談について、周囲に気付かれずに相談できる環境整備について協議

- 第3回の打合せについて（令和7年9月24日（水）Web会議で実施）

- ・いじめの未然防止のために必要な取組の検討

検討内容

- ・いじめ防止についてのショート動画の作成
- ・「いじめ総合対策【子供版】」の効果的な活用に向けた授業案の提示

- 第4回の打合せについて（令和7年10月23日（木）Web会議で実施）
 - ・意見書の内容について検討

検討内容

- ・いじめ防止に必要な取組について、加害者、被害者及び傍観者の視点から整理し、児童・生徒自らが取り組むべき内容について検討

イ 協議

東京都におけるいじめ防止等の対策について

「いじめ防止に必要なこと」の協議・検討

【高校生委員B（司会）】

本日は、「いじめ防止に必要なこと」について協議を行う。

はじめに、「いじめ防止に関するショート動画の作成」をテーマとし、高校生委員ができることや、高校生委員として取り組むべきことについて意見交換を行う。

【高校生委員D】

ショート動画の内容については、いじめる側、傍観する側、いじめられる側の三つの立場から見た姿を、ショート動画として表現していくとよいのではないかと思います。

また、高校生委員それぞれの視点を生かしながら、いじめの背景にある感情や、いじめに対する誤解、無関心でいることの危険性を伝えていくことが大切ではないか。

学校に対しては、動画を視聴した後、グループワークを行い、いじめに対する考え方や意識の変化についてアンケートで振り返る取組を行ってもらえるよう、働きかけていくとよいのではないかと思います。

さらに、社会に向けては、動画をSNSで発信するとともに、行政や企業、地域団体などにも広めていただき、啓発イベントなどを通じて、いじめの危険性や子供からのSOSに早く気付ける社会づくりにつなげていきたい。

【高校生委員D】

実際に起きているいじめや、いじめにつながる可能性のある行為を題材にしたショート動画を作成していくとよいのではないかと。高校生や中学生、小学生にも影響力のある人物に演じてもらうことで、より多くの児童・生徒に関心を持ってもらえるのではないかと思います。

また、その動画をクラスや朝会などで全校生徒と一緒に視聴し、感じたことについてア

ンケートを行い、いじめ防止協議会での話し合いの内容と併せて学校内に広めていく取組を行っていききたいと思う。

行政に対しては、区市町村の公式ホームページで動画を掲載したり、後援や支援を行ったりすることで、動画の影響力や信頼性を高めるなど、行政ならではの役割を担ってほしい。

【高校生委員B】

今回のショート動画については、加害者や被害者の立場だけでなく、第三者の目線を中心に取り上げることが、最も効果的ではないかと考える。第三者の立場は、私たちにとって身近で共感しやすく、ショート動画という形にすることで、子供たちの間でも話題にしやすくなるのではないかと。

また、学校に対しては、ショート動画を題材として活用できる場面が限られている中でも、グループワークを行うことが重要ではないかと考える。学校の取組の一環として、グループワークを通じて子供たちがいじめについて考える時間を設けることで、いじめに対する意識をより高めることにつながるのではないかと。

行政にお願いしたいこととして、いじめ防止の啓発に加え、ネットニュースなどを活用して情報を発信していくことが考えられる。中高生がいじめについて話し合う機会や、話題にする場面が増えることで、いじめ防止への意識が広がっていくのではないかと。

【高校生委員C】

他の委員と重なる部分もあるが、第三者目線に加えて、いじめる側、いじめられる側それぞれの立場を取り上げたショート動画が有効ではないかと思う。いじめといじりの違いについては、これまでの協議会の中でも何度か話題に上がってきた。その違いを分かりやすく示すことで、傷付く人を減らしていけるのではないかと。

また、影響力のある人物に出演してもらうことに加え、ドラマとして演じるだけでなく、その人物自身のメッセージを伝えることで、より心に響く内容になるのではないかと考える。

【高校生委員E】

高校生委員ができることとして、人の行動の選択が最終的にどのような結果を生むのかをテーマにしたショートドラマを制作することが考えられるのではないかと。

ドラマの中で複数の選択肢を提示し、その選択を重ねていくことでストーリーが分岐し、最終的に異なるエンディングを迎える構成とすることで、視聴者に新たな気づきを与えるとともに、話題性を生み出すことができるのではないかと考える。

【高校生委員A】

私も、いじめを自分たちの問題として考え、ショート動画を制作することがよいと考える。その際、動画の中で伝えたいメッセージを一本にしぼることで、より分かりやすい内容になるのではないかと考える。

また、動画は、いじめの加害者・被害者・傍観者という三つの視点から構成するとよいと考える。さらに、「いじめ」の場合と「いじり」の場合の二種類の動画を制作することで、より多くの生徒にとって理解しやすいものになるのではないかと考える。

完成した動画については、学校で上映するほか、SNSやポスターなどを通じて紹介することで、より多くの人に伝えることができるとよいと考える。

【高校生委員 J】

高校生委員にできること、また、すべきこととして、提案の作成に関わる際に、高校生委員の視点から見た現在の学校の状況を整理し、それを動画に反映することで、学生から大人までが、児童・生徒のリアルな視点について考えるきっかけになるのではないかと考える。

また、私たち自身も、自分の周りではどのような状況があるのかという視点を持ち、いじめを身近な問題として意識することが重要だと考える。その上で、高校生委員が手本となるよう、日常的に明るい声かけを行い、いじめをなくす雰囲気づくりに取り組んでいく必要がある。

【高校生委員 F】

ショート動画を通していじめ防止のメッセージを広めていくために、学生として私たちができることは、私たちが身近で知っている体験を基に、共感を得られる内容として映像化し、それを多くの人に広めていくことだと考える。

【高校生委員 G】

高校生委員ができることとして、学生にしか分からない「少し嫌だな」と感じることや、いじめにつながりかねないと感じる場面があると思う。

そのため、高校生委員が自分たちの関わっている学校などでアンケートを実施し、その結果を基にショート動画や台本を制作することで、学生にとってより身近に感じられる内容にすることができるのではないかと考える。

【高校生委員 B（司会）】

これまでの意見をまとめると、いじめの加害者・被害者・傍観者の三つの視点から構成したショート動画を制作し、その内容としては、「いじり」と「いじめ」の違いを明確に示す二種類の動画とするという方向性が示された。

また、学生にしか分からない感覚や実態をより深く掘り下げることで、多くの人にとっ

て話題のきっかけとなる内容にするとともに、駄目なことは駄目であると、はっきり示すことが重要であるという意見が出された。

併せて、学校においては、取組後のアンケートの実施や話題性を生かしたグループワークなどを行うことが有効ではないかという意見が出た。行政に対しては、啓発イベントの実施など、いじめ防止に向けた啓発の取組を進めてほしいという意見が出た。

今後は、これらを踏まえ、高校生委員として自分たちにできること、また、すべきことについて、さらに検討を深めていきたいと考える。

【高校生委員D】

ショート動画の内容について、皆さんから様々な意見が出たが、三つの視点で描くこと、行動の選択がどのような結果を生むのかを示す分岐の構成、また、「いじめ」と「いじり」の境界線を明確にすることのいずれも重要だと感じた。

それらをどのように一つにまとめるかを考えた結果、動画の本数は多くなる可能性はあるが、整理して制作することができるのではないかと考えた。

まず、行動の選択がどのような結果を生むのかという点について、いじめを変えることができる存在は傍観者であると考え、傍観者の視点を基本に描いていくことがよいのではないか。このような構成のショート動画は、学校の教材としても活用できるのではないかと考える。

授業の中で、動画を見ながら自分で行動を選択し、その結果としてどのようなエンディングを迎えたのかを振り返ることで、自分自身のいじめに対する意識や認識を見つめ直すことにつながるのではないかと考える。

また、いじめられている側といじめている側の視点については、同じ場面・同じシーンを、被害者と加害者それぞれの視点から描くことが有効だと考えた。加害者側は軽いいじりのつもりで行っている行動であっても、被害者側から見ると嫌だと感じ、いじめとして受け取られていることがあるという点を、両者の視点を比較することで示すことができると考える。

このように描くことで、「いじめ」と「いじり」の境界線についての理解をより深めることができるのではないかと考える。

以上のことから、これらの構成を組み合わせた形でショート動画を制作していくことがよいのではないかと考える。

【高校生委員B（司会）】

ここで、事前の打合せの中で高校生委員Hが述べていた意見について紹介する。高校生委員Hからは、ショート動画の内容について、いじめのきっかけを特に強調して表現することが重要であるとの意見があった。また、いじめ防止は特別なことではなく、日常の中にある優しさを伝える内容とし、過度にリアリティを強調して怖さを与えるのでは

なく、やさしい表現とすることで、小学生にも見やすい動画にすることが望ましいとの考えが示された。

さらに、動画を活用した授業の前後で、いじめに対する意識の変化を把握するためのアンケートを実施することや、制作した動画を地域や教育委員会等を通じて発信していくことが提案された。

【高校生委員C】

ショート動画を制作することを前提とした上で、まず、私たちにすぐにできる取組として、学校でいじめに関する視点についてのアンケートを実施することができるのではないかと。

また、日頃から高校生委員が率先して、互いに明るい声かけを行っていくことで、それ自体がいじめ防止につながり、動画制作に先立つ取組としても有効になるのではないかと。

そのため、高校生委員が中心となって明るい声かけを行うとともに、アンケートを積極的に実施していくことがよいのではないかと考えた。

【高校生委員B（司会）】

これまでの意見を踏まえた上で、「ここはもっと強調したほうがよいのではないかと」いった点や、追加で意見・話題があれば、共有していただきたい。

最終的には、意見書として一つの短い文章にまとめていくため、これまで私たちが話し合ってきた内容を整理しながらまとめていく。

【高校生委員D】

「いじめ」と「いじり」の区別は、加害者と被害者とで受け止め方が大きく異なるため、非常に難しいと感じる。

例えば、自分としては軽い気持ちで言った言葉であっても、相手にとっては想像以上に強く響いてしまうことが、実際にあると思う。

そのため、「どこからがいじめなのか」という線引きは簡単ではないが、最終的には、相手である被害者が「嫌だ」と感じた時点で、それはいじめになるのだと考えた。

このように、「いじめ」と「いじり」の境界線については判断が難しい点があり、改めて考える必要があると感じた。

【高校生委員B】

これまでの意見を聞いて、改めて、「いじり」と「いじめ」の違いを明確にすることや、そのきっかけを示すことの重要性を感じた。また、行動の選択によってストーリーが分岐していくという構成についても、非常に有効であると感じた。

私たちは一人一人異なる存在であるからこそ、他の人の選択や考え方をその後の話題として共有することができ、動画をきっかけに広めていくこともできると思う。ショート動画は、面白い、楽しいといった前向きな印象をもってもらいながら、内容を伝える手段として効果的であると感じた。

また、行政による啓発イベントの実施についても、新たな視点として重要だと感じた。東京都が制作・発信するショート動画を通じて、いじめ防止に取り組んでいることが伝われば、関心をもつきっかけにもなるのではないかと思う。

学校においても、生徒が動画を広めたり、教員と話題にしたりすることで、取組が広がっていく可能性があると感じた。併せて、取組の前後でアンケートを実施することは、意識の変化や効果を把握する上で有効であると考えた。

今回の意見交換を通じて、自分自身に新たな気付きがあり、こうした取組によって、いじめに対する意識や考え方が変わる生徒が増えていくのではないかと感じた。

【高校生委員A】

先ほど出ていた意見の中で、表現が過度にリアルになりすぎると、小学生などの児童が怖いと感じてしまうのではないかという点に共感した。

そのため、現実性を重視したドラマだけでなく、幼児や児童など、より年齢の低い子供向けの内容についても制作することで、幅広い年代に伝わりやすいものになるのではないかと考えた。

【高校生委員D】

小学生向けの動画については、表現が過度にリアルになり過ぎることはあまり望ましくないと感じた。一方で、中学生や高校生については、発達の段階を踏まえると、ある程度現実に即した内容でなければ、いじめに対する危機感や問題意識が十分に伝わらないのではないかとも思う。

そのため、対象となる年代に応じて、小学生向けと中高生向けで動画の内容や表現を分けて制作していくことがよいのではないかと考えた。

【高校生委員I】

子供向けには、やさしい表現の動画を制作するという考えに賛成である。一方で、中学生や高校生になると心の発達も進むため、ある程度リアルな内容でなければ、いじめに対する問題意識が強くなり心に残らないのではないかと感じた。

実際に、高校生を題材とし、いじめを扱ったドラマが強く印象に残っている経験からも、多少踏み込んだ表現であっても、現実に即した内容のほうが心に刺さる場合があると思う。

そのため、小学生向けにはやさしい表現を用い、中学生・高校生向けには、より現実的

で人の心理が伝わる内容とするなど、対象の年代に応じて表現の深さを調整した動画を制作していくことが重要ではないかと考えた。

【高校生委員G】

小学生向けに、やさしい内容を題材としたショート動画を制作することには賛成である。一方で、高校生や中学生の中には、過去にいじめを経験したり、つらい体験をしたりしている人もいると思う。

そのため、授業などで全員が視聴する場面において、あまりにもリアリティが強い動画を扱うと、フラッシュバックを起こしたり、思い出したくない記憶を呼び起こしたりしてしまう可能性があるのではないかと考えた。

このことから、授業で扱う動画については、一定のリアリティはもたせつつも、過度につらさを感じさせない、配慮した内容とすることがよいのではないかと考えた。

一方で、SNSなど、自らの意思で視聴する動画については、よりリアルな表現を取り入れていくことも可能ではないかと考えた。

このように、視聴の場面に応じて、動画の表現の強さを使い分けることが重要ではないかと思う。

【高校生委員B】

これまでの意見を聞いていて、いじりやいじめがきっかけとなり、不登校を経験した人もいるのではないかと感じた。リアリティを求めすぎる表現も適切ではないが、一方で、高校生や中学生にとっては、内容が優しすぎると「現実とは違う」と受け取られてしまう可能性もあると思う。思春期という時期もあり、反発心をもってしまうこともあるのではないかと感じた。

その一方で、過去にいじめを経験した人が、過度に刺激を受けることがない内容とすることも非常に大切だと感じた。

その点で、行動の選択によってストーリーが分岐する構成は有効であると思う。自分が取った行動が本当に正しかったのか、相手を傷付けていなかったのか、自分が同じことをされたらどう感じるのかといった点を、振り返るきっかけになるのではないかと考えた。自分では好意のつもりで行っている行動であっても、実は相手にとっては嫌なものになっていることに気付く機会になると思う。

また、表現の強さについては、過去にいじめを経験した人にとって刺激が強くなり過ぎない範囲で、しかし、子供向けになり過ぎない程度のリアリティをもたせることが重要であり、そのバランスを取ることは難しい課題であると感じた。

例えば、軽い接触や何気ない行動であっても、人によっては不快に感じる場合があり、そのような日常の場面を題材として取り上げることも有効ではないかと思う。

このような点から、分岐型のストーリーは非常に有効であり、「いじり」と「いじめ」

の違いを明確に示しつつ、リアリティの程度にも配慮した内容とすることが重要であると感じた。

【高校生委員D】

リアリティを追求しようとするれば、どこまでも踏み込むことができると思う。一方で、いじめを扱うに当たり、「やさしい表現」という言葉がこれまで多く出ていたように感じたが、その「やさしさ」の基準がどのようなものなのかについては、あまりイメージできていない。

いじめを「やさしい感じ」で扱うということが、具体的にどのような表現を指すのかについて、少し疑問に感じた。

【高校生委員G】

「やさしいいじめ」というよりは、「やさしい動画」とすることがよいのではないかと考えた。

例えば、いじめを扱ったドラマでは、いじめの場面が長く、強く描写されることがあるが、そのような表現は小学生などにとっては負担が大きい場合があると思う。

そのため、動画においては、特に小学生向けの場合、いじめが行われている場面を直接見せる表現は控えたり、描写の時間を短くしたりするなどの工夫をすることで、視聴した際に過度につらい気持ちにならずに済むのではないかと考えた。

【高校生委員C】

リアリティについて考える中で、いじめをしている側の立場から見ると、周囲に合わせ過ぎることで、かえって生きづらさを感じる人が増えてしまう可能性もあるのではないかとと思う。

そのため、どこまで配慮し、どこまで表現するかというラインを見極めることは非常に難しいと感じたが、そうした点もうまく取り入れることができれば、より現実に即した、伝わりやすい動画になるのではないかと考えた。

【高校生委員B】

皆さんの意見を聞く中で、以前参加した発表で紹介されていた「2：2：6の法則」を思い出した。これは、2割は自分に関心や好意をもっている人、6割は特に意識していない人、残りの2割はあまり好意的ではない人がいるという考え方である。この考え方は、動画づくりにも生かせるのではないかと感じた。

先ほど意見にあった「気にし過ぎてしまう人が出てしまうのではないか」という点についても、確かにそのとおりでと思いました。特に、スマートフォンやインターネットが身近な環境では、周囲の反応を過度に気にしてしまうこともあると思う。

そのため、「自分のことを好いてくれている人も一定数いる」という安心感を伝える視点を動画に取り入れることで、いじりやいじめに対する受け止め方が少し変わるのではないかと考えた。自分ではいじめだと思っていたことが、実は周囲との関係性の中での受け止め方の違いであったと気付く場合もあるのではないかと思う。

そのような視点も含めて考えると、いじられる立場にある人の感じ方や受け止め方を丁寧に扱うことも一つの切り口になるのではないかと感じた。

ただし、こうした点をどのように表現するかについては非常に難しく、慎重に考える必要があると改めて感じた。

【高校生委員D】

ショート動画の方向性については、おおよそ整理されてきたのではないかと感じた。一方で、いじめ対策として実施するアンケートや、啓発イベントについては、まだ具体的な内容が十分に詰められていない部分があるのではないかと思う。

例えば、取組の前後でアンケートを実施する場合に、具体的にどのようなことを聞きたいのか、どのような意識の変化を把握したいのかを明確にしなければ、目的が曖昧になってしまう可能性があると感じた。

また、啓発イベントについても、どのような内容や形式で実施するのかを具体的に検討しないと、取組全体の方向性を見失ってしまうことがあるのではないかと思う。「アンケートを実施する」「イベントを行う」という表現にとどまらず、アンケートで把握したい内容や、イベントの具体的な中身についても、今後さらに掘り下げて検討していく必要があると考えた。

【高校生委員I】

出前授業後に実施されるアンケートについては、選択式で「考えが変わったか」を番号で回答する形式が多いが、このようなアンケートは短時間で終わってしまい、十分に考えずに回答されてしまう場合も少なくないと思う。そのため、○・×や番号選択による回答ではなく、受講後に感じたことや考えたことを文章で記載する形式のアンケートとする方がよいのではないかと思う。

【高校生委員B】

デジタルで実施するアンケートについては、短時間で内容を深く考えずに回答してしまう生徒も多いのではないかと感じる。特に、選択式の場合は無意識に中間の選択肢を選ぶ生徒が多いのではないかと思う。

その点、アナログの記述式アンケートは、時間をかけて自分の考えを整理し、言葉にすることができるという意味で有効ではないかと思う。記述を求められることで、ショート動画などの内容についても、より深く考えて受け止める必要性が生まれると思う。

また、1から4といった段階評価に分けるのではなく、動画や授業を視聴する前に、「いじめと聞いて何を思い浮かべますか」といった問いを設定し、自由に記述させる設問を設けてもよいのではないかと思う。簡単な記入例を示しつつ、考えに影響を与えすぎない形で記述式のアンケートを行うことも、有効な方法ではないか考える。

【高校生委員C】

細かい点ではあるが、アンケートを記述式で行うことには賛成である。その上で、匿名で実施する方が、本来思っていることを書きやすいのではないかと感じる。また、家庭で書いてくる形式よりも、その場で時間を確保した方が、率直な意見が出やすいのではないかと思う。

一方で、宿題形式にすると提出しない生徒も出てくる可能性があるため、授業内などで一定の時間を取り、できるだけ多くの生徒が無理なく記述できる内容とすることが重要だと考える。そうすることで、より具体的で現実に即した意見を把握できるのではないか。

【高校生委員B（司会）】

これまでの意見を簡単にまとめさせていただく。

学校で実施するアンケートについては、選択式ではなく記述式で回答すること、いじめに関する考えについて事前・事後の記述を行うこと、また、名前を記載しない匿名形式とし、その場で記入してすぐ提出できる形とすることが望ましいのではないか、という意見が出た。

ひとまず、学校におけるアンケートについては、以上の点で一度整理させていただく。続いて、啓発イベントの実施についてお聞きしたい。

もし啓発イベントを行うとした場合、実際に参加する高校生の立場から見て、「これは惹かれる」「参加してみたい」と感じるような内容について、何かアイデアはあるか、御意見を伺いたい。

【高校生委員G】

学校で実施されている取組の例として、闇バイトについて、警視庁の方が演劇のような形式で分かりやすく伝えてくれたことがある。このような方法であれば、体育館などでも実施することができ、内容も身近に感じられるのではないかと思う。そのため、啓発イベントにおいても、演劇的な要素を取り入れた形は有効ではないか考える。

【高校生委員F】

いじめに関する啓発イベントにおいては、話題性のある人物や行動が前面に出ることで、本来伝えたい内容が打ち消されてしまうことがあってはならないと考える。

そのため、もし本当にいじめの啓発イベントを実施するのであれば、アイドルやインフ

ルエンサー、タレントを起用するのではなく、私たち高校生自身が主体となり、実際の声や思いを大切にしながら、誠実にいじめと向き合う姿勢が伝わるような啓発イベントを行う方がよいのではないかと思う。

【高校生委員B（司会）】

残り時間が限られている中で、話したい内容は多くあるものの、全てを扱うことは難しい状況だと感じる。そのため、論点を少しずつぼって整理していく必要があるのではないか。

その上で、この時間内では、啓発イベントについて十分にまとめ切ることが難しく、議論が広がりすぎてしまう可能性もあるため、今回は一旦整理の対象から外した方がよいのではないかと考える。

一方で、学校での取組やショート動画と結び付けていくことを考えると、行政からの公式な支援や関与がある取組が、この中では最も現実味があるのではないかと感じる。

内容については、できるだけしぼり込んだ形とし、いじめの加害者、被害者、傍観者という三つの視点を意識した構成とすることで、それぞれの立場から考えるきっかけをつくることが重要ではないかと思う。また、そこからストーリー性をもたせ、視聴者の立場や感じ方によって受け止め方が変わり、もう一度見直したいと思えるような内容にすることが重要ではないかと思う。

ただし、内容を画一的にし過ぎると、現実味が薄れたり、批判を受けたりする可能性もあるため、その点には配慮が必要だと考える。こうした動画と併せて、学校では、匿名で記述するアナログ形式の取組により、いじめについて改めて考える機会を設けることも有効ではないかと思う。

【高校生委員D】

先ほど話題に出ていた、いじめの加害者・被害者・傍観者という三つの視点に加え、ストーリー性をもたせ、特に傍観者の行動選択によって展開が変わる構成とすることが重要ではないかと考える。どのような行動を取るかによって結果が分かれるような内容や演出を取り入れることで、より自分の事として考えられるのではないかと思う。

その上で、こうしたストーリーや行動選択の内容については、私たち高校生が具体的に案を作成し、東京都と協力しながら、演者の手配や映像の制作について東京都に支援をお願いし、一緒にショート動画を作り上げていくことは、私たちにも可能ではないかと考える。

【高校生委員B】

これまでの議論を聞いていて、私たち高校生ができることは決して多くはないと感じるが、その中でも、内容を友達に話したり、話題として広げたりしていくことが重要ではな

いかと考えた。ショート動画を通して、「自分がこの行動を選んだ結果、こうなった」「ハッピーエンドだった」「少し後味が悪かった」といった感想は、いじめという普段は簡単に話題にしにくいテーマであっても、比較的話しやすくなるのではないかと思う。

ショート動画の作成において、私たちができることとしては、動画を見るだけで終わらせるのではなく、その内容をきっかけとして周囲に話題を振り、どのように感じたかを共有していくことが大切だと考える。まず私たち自身が動画をしっかりと見て理解し、その上で、どのように周囲の人を巻き込んでいくかを考えていくことが重要ではないかと思う。

【高校生委員 I】

演出を考えたり、このように東京都の高校生と関わったりしながら議論できるのは、学校の代表として参加している私たちだからこそできることだと感じる。その点も踏まえ、東京都と連携しながら動画を作成し、実際に視聴した上で授業を行ったり、周囲に広めていったりする取組は、いじめ防止に向けて私たちが主体的に取り組むべきことではないかと考える。

このように自分の中でまとめると、高校生委員として都と連携して取組を進め、その成果を学校現場に還元していくことが重要なのではないかと思う。

【高校生委員 C】

既に出ている意見と重なる部分もあるが、高校生である私たちは、SNSが身近な存在だと感じる。一方で、インフルエンサーの方を起用することは、私たち自身の力だけでは難しい面がある。しかし、演出や脚本を私たちが考えたり、行政と協力したりすることであれば、実現できるのではないかと感じた。

【高校生委員 B（司会）】

時間となったため、「いじめ防止に関するショート動画の作成」をテーマとして、高校生委員ができることや、高校生委員として取り組むべきことについて意見を出し合う議論は、ここで終了とする。

続いて、「いじめ総合対策【子供版】の効果的な活用に向けた授業案の提示」について、高校生委員にできることや、高校生委員として取り組むべきことについて協議を行う。先ほどの協議と同様に、各委員から、事前課題に基づいて考えたことを御発言いただきたい。

【高校生委員 F】

私の考えは、児童・生徒のいじめに対する意識を高めることを第一の目的として、「いじめ総合対策【子供版】」を教材として、小学生・中学生・高校生が理解しやすく、参加

しやすい授業案を土台として企画することである。

具体的には、ロールプレイやクイズなどを取り入れ、児童・生徒が主体的に学べるような授業づくりの工夫を行うことが重要だと考える。授業実施後には、児童・生徒からフィードバックを得ることで、授業の効果や課題を確認し、改善点があれば、次回の授業内容に生かしていくことができる取組になるのではないかと思う。

【高校生委員D】

「いじめ総合対策【子供版】」を活用するに当たり、前提として、一人一人のいじめに対する知識を高めることで、いじめが始まる前に、その芽を摘み取る行動ができる力を育てていきたいと考える。

具体的には、授業の中で身近な場면을題材とし、ロールプレイを行ったり、その場に自分がいたらどのように行動するか、何ができるのかを考えたりする時間を設けることが有効ではないかと思う。こうした取組を、「いじめ総合対策【子供版】」を基に話し合う形で行うことで、理解を深めることができると考える。

また、これらの授業を学級ごとに実施することで、いじめを許さないという意識を学校全体に広げていけるよう、学校に働きかけていくことも重要ではないかと思う。

【高校生委員E】

少し抽象的な意見にはなるが、私たち自身がいじめについて知ろうとし、学んでいくことが大切ではないかと思う。その上で、児童・生徒、特に小学生が社会の中でどのような行動を取っていくのかという点が重要であり、その行動につなげていくことが必要ではないかと思う。

【高校生委員B】

私が考えた授業案は、ロールプレイを取り入れるものですが、演技などを通していじめを題材とし、「いじめ総合対策【子供版】」の内容に基づいた授業がよいのではないかと考えた。

具体的には、クイズ形式を取り入れたり、体験的に学んだりする授業が有効ではないかと思う。また、普段の自分たちの言葉が周囲にどのような影響を与えているのかについて、周囲の児童・生徒と話し合うことで、「普段の自分はどうか」を振り返る時間を設けることも重要ではないかと思う。こうした取組を通じて、自己理解や、他者に対する自分の関わり方を見直す授業もよいのではないかと思う。

続いて、高校生委員Hの意見を紹介する。

高校生委員Hからは、「いじめ総合対策【子供版】」の中から、年齢に応じた内容を使用し、グループに分かれていじめの定義や状況を再確認した上で、いじめ防止の方法や、い

じめに遭った際の対処について共有する。さらに、授業で出た意見や感想を学校のホームページなどで紹介し、学校ごとに意見交換を行っていきたい」との意見が出された。

【高校生委員 I】

他の委員の意見と共通する点もあるが、ロールプレイを取り入れることで、児童・生徒が受け身になるのではなく、主体的にいじめについて考えることができると考えており、その点について賛成である。

また、行政に対しては、年に数回、いじめに詳しい専門的な立場の方を学校に派遣していただき、授業を行ってもらうことも有効ではないかと思う。さらに、いじめ防止月間などの機会に、保護者や教職員も一緒に参加できる出前授業を実施することで、家庭、学校、地域が連携していじめ防止に取り組む体制をつくることのできるのではないかと考える。

【高校生委員 C】

「いじめ総合対策【子供版】」については、私自身、このいじめ防止協議会に参加して初めて知ったため、まだ知らない児童・生徒も多いのではないかと感じる。そのため、まずは、「いじめ総合対策【子供版】」の存在や内容を知ってもらうことから始めることが重要ではないかと思う。

その上で、先ほど出ていたような授業の工夫や取組につなげていくことで、より効果的な活用ができるのではないかと考える。

【高校生委員 A】

他の委員の意見と重なる部分もあるが、授業においては、スライドやロールプレイ、クイズなどを活用し、小学生・中学生・高校生、特に小学生や中学生でも理解しやすい内容としていくことが重要ではないかと思う。

授業内容としては、相談することの大切さを伝える活動や、困ったときにどのように行動すればよいのかといった知識について、基礎から学べる構成とすることも、同時に進めていけたらよいのではないかと考える。

また、東京都で実施されている「ふれあい月間」などの機会を活用し、私たち高校生委員が提案した授業を実施してもらうことで、より多くの児童・生徒に広げていくことができるのではないかと思う。

【高校生委員 J】

授業内容としては少し異なる視点になるが、この協議会に参加している私たちだからこそ、「いじめ総合対策【子供版】」を活用した授業づくりに協力できるのではないかと考える。高校生が関わりながら授業を進めることで、「学生でもここまで活躍できるのだ」と

いう意識が生まれ、児童・生徒がより主体的に授業に参加するきっかけになるのではないかと思う。

そのためにも、改めて、「いじめ総合対策【子供版】」を私たち自身がしっかりと読み込み、内容を正しく理解することが必要であり、その過程自体が、自分自身の考えを深めることにもつながるのではないかと考えた。

【高校生委員G】

公立学校では、年間でいじめに関する授業を複数回実施することになっていると聞いているが、私自身は、あまり記憶に残っていないほど内容が薄かったと感じる。

いじめは、いずれ学生同士の間で起こる問題であるため、正直なところ、教員や大人から一方的に言われても、実感をもって受け止められず、聞き流してしまうことも多いのではないかと思う。

その点、学生にとって最も話を聞こうと思えるのは、同年代の意見や経験だと感じる。そのため、「いじめ総合対策【子供版】」については、高校生委員自身が内容を整理した上で、まずは各自の学校において、学校全体やクラス単位で授業を行い、身近な生徒に対して、いじめ総合対策について知ってもらう取組を行うことが有効ではないかと思う。

さらに、可能であれば、地域の小学校や中学校を訪問し、講義や授業を行うことも一つの方法ではないかと考えた。一方で、全ての学校を訪問することは難しい場合もあるため、高校生委員が、「いじめ総合対策【子供版】」の中から「特に重要だと感じた部分」を選び出し、その内容をまとめた資料やマニュアルを作成して各学校に提供し、教員の方に授業で活用してもらうことも、学生にとって受け入れやすいいじめに関する授業につながるのではないかと考えた。

【高校生委員B】

先ほど高校生委員Gが話したように、先生方が話すよりも、私たち高校生が自分たちの言葉で伝えることで、内容の信憑性はより高まるのではないかと感じる。その点については、高校生委員Gの意見に強く共感する。

また、高校生委員Cが話した「いじめ総合対策【子供版】」についてだが、私自身も、高校生いじめ防止協議会に参加しなければ内容を詳しく知ることはなかった。もっと広めていかなければならないことだと、改めて感じた。

意見書の中にも高校生いじめ防止協議会のことが書かれているので、これをきっかけに、より多くの生徒に関心をもってもらえるようにしたいと考える。

今日、私たちは意見書を作成して提出しますが、それで終わりではなく、その後に私たち自身が実際に行動していくことが大切だと思う。そこで、私たちができることとして、内容をしっかり考えた上で、各高校に、先生ではなく生徒が主体となって授業を行うことができるのではないかと考えた。授業の形は、クラス単位でも、学年ごとに行うのもよ

いと思う。

その際、授業の内容をある程度統一することが大切ではないかを感じる。他の学校に行って直接授業を行うことが難しいという意見もあるが、それを踏まえると、各校で授業の一環として、高校生が高校生に向けて授業を行う形が現実的だと思う。

このような取組を行うことで、授業を行う高校生自身が、「いじめ総合対策【子供版】」について知る機会も増えるし、将来的には、小さな子どもたちに対して、いじめの重要性をどのように伝えていけばよいのかを考えるきっかけにもなるのではないかと思う。

【高校生委員C】

高校生委員Gが言っていた「大人には分からないこと」という点を、もう少し強調して伝えていけたらよいのではないかと思う。そのような視点を前面に出すことで、生徒にとっても、より身近で分かりやすい内容になるのではないかを感じる。

【高校生委員B】

私たち自身が授業を行うということが、とても大切なのではないかと思う。

一方で、授業や取組については、「ふれあい月間」などがあっても、正直なところ、あまり記憶に残っていない生徒が多いのではないかと思う。私自身も、小学生のときに「ふれあい月間」や他学年との交流、あおぞら給食などがあつたが、内容はほとんど覚えておらず、「楽しかった」という印象だけが残っているように感じる。

しかし、「いじめ総合対策【子供版】」を広めていくことを考えると、ただ「楽しかった」で終わるのではなく、「いじめは駄目だ」という意識が、しっかり記憶に残ることが大切だと思う。そのためには、大人が伝えるよりも、私たちのように、これから大人になっていく過程にいる高校生が、年下の子どもたちに伝えることに意味があるのではないかを感じる。大人になってから伝えることもできるが、今だからこそできることがあるのではないかと思う。

ロールプレイやクイズ形式の授業も大切だが、「楽しかった」で終わらない授業をつくるのが重要だと考える。「いじめ総合対策【子供版】」のパンフレットを配布しても、印象に残らなければ、家に帰って中身を思い出せないまま終わってしまうことも多い。特に小学生の場合、そのようなことが起こりやすいと感じる。

私たちが伝える立場になることは、とても難しい一方で、重要な取組だと思う。そのためには、授業後のフィードバックを生かしながら、私たち自身が授業案を考え、改善していく必要があると考える。

また、中高一貫校などでは、中学生と高校生が関わる機会もあると思うので、同じメンバーに対して継続的に授業を行うことを想定すると、より分かりやすくなるのではないかと感じた。普段の友人たちに対しても、『いじめ総合対策【子供版】』とはどのようなものか、「私たちがこれまで何に取り組んできたのか」を伝える場にもなると思う。

多くの生徒は、私たちが都の事業に関わっていることは知っていても、具体的に何をしているのかまでは知らないと思う。そのため、私たちが取り組んできたことは難しい内容ではあるものの、皆がよりよく、楽しく過ごしていくために必要なことであるという点を、しっかり伝えていきたいと考える。

【高校生委員D】

「いじめ総合対策【子供版】」を、今後どのように広めていくつもりなのか気になる。また、誰が授業を行うのかという点についても、整理して考える必要がある。

例えば、私たちが授業を行うと言っても、自分の学校以外ではどうするのかという課題が出てくると思う。誰が授業を行い、誰に対して行うのかという点を、はっきりさせる必要があると感じる。

その上で、「いじめ総合対策【子供版】」を、どのような方法で、どの範囲まで広げていくのかについて、皆さんと一緒に考えていきたい。

【高校生委員B】

参加している皆さんの通う学校は、それぞれ地区が違うのではないかなと思う。東京都の中でも、区や市によって状況が異なる部分があるのではないかなと感じる。例えば、私の高校は足立区と荒川区のちょうど境目に位置しており、そのような地域性も関係してくるのではないかなと思う。

【高校生委員D】

人の印象に残るものは、やはり身近な人から何か言われたときなのではないかなと思う。逆に、受身のまま話が進んでしまう場合は、あまり記憶に残らないのではないかなと感じる。

まずは私たちが口頭で伝える授業を行うことで、身近な人から直接伝えられるという形とすることが大切だと思う。それに加えて、その内容を踏まえた上で、ロールプレイなどを行い、自分自身が実際に動き、考え、アクションを起こすという過程を含めて授業をつくり上げていくこともよいのではないかなと思う。

また、先ほど話題に出ていた、他の学校ではどうするのか、誰が授業を行うのかという点についてだが、どの学校の生徒でも実施できるような授業のマニュアルをつくり込むことができれば、私たちの学校だけでなく、他の学校でも同じように、「いじめ総合対策【子供版】」を用いた授業を行っていくことができるのではないかなと考えた。

【高校生委員E】

授業を受けた際に内容が記憶に残るのは、学習者の感性に訴えかける要素がある場合ではないかなと考えた。そのため、感性に訴えかける工夫として、前半で話題となったショー

ト動画やその他の芸術的要素を含む教材や、学習者自身が内容を咀嚼しながら考える過程を伴う題材を活用することが有効ではないかと思う。

【高校生委員B】

ショート動画は非常に有効な手段であり、活用の可能性があると考えた。そうした取組を踏まえると、授業内容全体として一貫した筋が通る構成にしていくことが重要だと思う。また、誰でも取り組める内容とするためには、授業の土台をしっかりと設計する必要があり、その過程でフィードバックを行うことや、児童・生徒を飽きさせない工夫も求められると考えた。さらに、アンケートの実施なども、授業に取り入れる必要があるのではないかと感じた。

【高校生委員C】

自分たちが授業を行うという取組に加えて、これまでの打ち合わせで話し合った内容で示された、学校で行ってほしいことに関する、「いじめ総合対策【子供版】」をベースにし、私たちや他の高校生が授業を行うことができればよいと考えた。また、印象に残る取組という観点では、自分たちと同じ立場にある高校生が授業を行うことで、より記憶に残りやすくなると思う。

【高校生委員G】

印象に残る授業という観点では、資料に記載のあるロールプレイやクイズ大会などの手法が考えられると思う。その中で、ロールプレイについては、教員等が目の前で演じるのか、学校の児童・生徒が役を担って行うのかによって、受け止め方が大きく異なると感じた。特に、いじめを題材としたロールプレイの場合、いじめられる役やいじめる役を担う必要が生じるが、役であったとしても、いじめられる立場を演じることに負担を感じる児童・生徒や、いじめる役を担うことに抵抗を感じる児童・生徒もいるのではないかと思う。そのため、演技であっても、いじめる側・いじめられる側の経験を求めることについては慎重に考える必要があり、どのような方法が適切なのか気になる。

【高校生委員B】

いじめに関する授業については、ロールプレイの代わりにショート動画を活用することで、演じる児童・生徒の心理的負担を軽減しつつ、「自分たちだったらどうするか」を考えるきっかけをつくることができると考えた。授業時間や高校生が主体となって実施することを踏まえると、ショート動画やクイズ大会の方が取り組みやすいと思う。また、ふれあい月間の時期に、「いじめ総合対策【子供版】」を活用した授業を行うことは効果的であり、実施する生徒を替えるなどの工夫により、同じ内容でも異なる気付きが生まれるのではないかと考えた。さらに、高校生が授業を行うことを前提に、共通の土台となる資料を

作成し、各学校の実情に応じて実施していくことが望ましいと思う。

【高校生委員D】

高校生が共通のマニュアルを基に授業を行う前提とした場合、「いじめ総合対策【子供版】」の効果的な活用に向けた授業案として、「ふれあい月間」などの機会を活用することが考えられると思う。授業前にアンケートを実施した上で、「いじめ総合対策【子供版】」の内容に沿った説明を行い、ショート動画の視聴やグループワークを取り入れ、その後クイズを実施し、最後にまとめと意識の変化を確認するアンケートを行う流れがよいのではないかと考えた。

【高校生委員B】

「いじめ総合対策【子供版】」には、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、学校で相談できる専門職についての記載があるため、そうした内容を授業の中で扱うことも有効ではないかと考えた。例えば、誰が相談相手になるのかをクイズ形式で示したり、いじめに関する内容をグループワークとして取り上げたりすることができると思う。

また、「いじめ総合対策【子供版】」は児童・生徒にとってあまり知られていない資料であるため、配布すること自体が理解を深めるきっかけになるのではないかと感じた。クイズやショート動画と組み合わせて活用することで、内容への関心を高めることができるのではないかと感じた。

【高校生委員D】

これまで中学生・高校生を対象とした授業について検討してきたが、小学生向けの「いじめ総合対策【子供版】」もそれぞれ用意されていることから、小学生に対してはどのような取組や授業が考えられるのかについても検討する必要があるのではないかと感じた。

【高校生委員B（司会）】

時間が限られている中での整理として、まず高校生向けの授業案を土台として作成し、その内容を基に、小学生向けには言葉を柔らかくするなどの工夫を加えながら段階的に展開していく方法がよいのではないかと考えた。授業案の土台は、「いじめ総合対策【子供版】」とし、高校生が作成したものを、学校や行政とも共有しながら広げていくことが重要だと思う。意見書として一つにまとめていく必要があるため、全体の方向性を整理していくことが求められると感じた。

【高校生委員E】

「いじめ総合対策【子供版】」の後半には、昨年度の高校生いじめ防止協議会で話し合

われた内容や、「学校で行ってほしいこと」として、動画の鑑賞などが既に記載されているが、実際には学校で十分に実施されていない取組も多いのではないかと感じる。そのため、意見書をまとめるに当たっては、学校に委ねるだけでなく、高校生委員が自ら実施する取組を重点的に位置付けた方がよいのではないかと考えた。

【高校生委員B】

その点は、意見書の中に明確に記載した方がよいと思う。既に書かれている内容が必ずしも学校で実施されているとは限らないからこそ、高校生委員が主体となって取り組む意義があると感じた。最後まで高校生委員が責任をもってまとめていく姿勢を示すことが重要だと思う。

【高校生委員I】

授業を行う主体については整理されてきたが、誰を対象に授業を行うのかという点も重要だと感じた。児童・生徒だけを対象とするのではなく、教員や保護者も巻き込んで取り組まなければ、十分な効果は得られないのではないかと考える。そのため、授業の対象についても明確にした上で、学校の教員や保護者を含めた形で実施することを検討すべきではないかと考えた。

【高校生委員B】

授業の実施に当たっては、児童・生徒だけでなく、教員や保護者にも内容が伝わるのが重要だと感じた。そのため、授業やマニュアルの作成段階から教員と共同で検討し、高校生が中心となりつつ、教員の意見も取り入れていくことが有効ではないかと考えた。また、実際に取組を進めることで、保護者への理解や周知にもつながるため、教員や保護者を巻き込んだ形で進める必要があると思う。

予定した時間となったため、本日の議論を【高校生委員E】委員、【高校生委員J】委員にまとめていただく。

【高校生委員E】

私たち、「高校生いじめ防止協議会」は、東京都のいじめ防止の取組を一層充実させていくために、いじめ防止についてのショート動画の作成と「いじめ総合対策【子供版】」の効果的な活用に向けた授業案の提示という二つの取組に決定した。いじめ防止についてのショート動画の作成という取組を踏まえて、自分たち小中高校生には、いじめを自分の事として捉え、いじめのない学校や社会にするために働きかけること。また、普段からお互いに明るい言葉がけができる雰囲気をつくること。学校には、動画を視聴する機会をつくり、それについて話し合い活動やグループワーク、アンケートを実施する時間をつくること。社会には作成した動画を用いて、いじめ防止の取組を実施すること。小中高生がいじ

めについて学んだことを生かすために支えることを提案する。

【高校生委員 J】

また、「いじめ総合対策【子供版】」の効果的な活用に向けた授業案の提示という取組を踏まえて、自分たち小中高生には、いじめについて知り、いじめを防止するための動画を考えること。いじめをいじめと判断し、身近な人に相談する力を身に付けること。学校には「いじめ総合対策【子供版】」を活用した授業を定期的に行うこと。社会には、社会全体で子供たちを見守り、安心して自分らしく過ごせる環境をつくること。学校でのいじめ防止に向けた取組を知り、社会からいじめがなくなるような取組をすることを提案する。

これらの提案のために、私たち高校生委員 10 名は、いじめの加害者・被害者・傍観者という三つの視点を踏まえ、行動の選択肢などの動画のシナリオを検討し、東京都と協力して動画を作成する。また、作成した動画を自らのコミュニティに広げていく。

併せて、高校生委員が「いじめ総合対策【子供版】」、ショート動画を基に、教員向けの授業マニュアルを作成する。そして、高校生委員が学校と協力し、中学生・高校生を主な対象として授業を実施することで、児童・生徒、保護者、教員が主体的にいじめについて考える機会を創出する。

【高校生委員 B（司会）】

本日の内容が全て終了したので、進行を【高校生委員 A】にお返しする。活発な協議、また、スムーズな進行への御協力、感謝する。

【高校生委員 A】

以上で、本日の内容はすべて終了とし、高校生いじめ防止協議会を閉会する。